# 伊勢物語闕疑抄

巳

特別
イ 4
3163
208(4)

貴
14
3163
208(4)

[illegible]

# 閑話抄巻第四

[illegible]

[illegible]

前の浜とれる時分なる尾張へ行く伊勢へ
みち人多時の事なるを大ぜい伊勢尾張の道の
つちくれなりしかさの家のつゝへ歩文(サイクワ)より
はたらふ女童(ワラハベ)なるをはたらく人多くあるくとなくて
取りたる人へ
[illegible]
つまをとりてよわるものの法
歩文(サイクワ)と一度見なんと[illegible]

んなりのとき、ふしもとの熟(ジク)しら拙(ツタ)といを
して、ものがたり事なりと小野篁(オノノタカムラ)が配所(ハイショ)へとも
ひしく時　雷の原八十瀬(ハラヤソセ)のけぶりなびくとて人を
をしげしよわ[illegible]のけぶり毋(ハハ)をいとひて若菜(ワカナ)の所
春日野(カスガノ)のそばの暮守(モリ)出て若菜つんでとしつかのいけりえ出んと
てんとうつかの暮もるづ[illegible]業(ナリ)内者をなべさなれ
はんにはなれめ[illegible]さなり[illegible]わすの所をみり
ものべさせんといふなり
ひと男の歌文(オウク)一内(ウチ)のはけひしてまんとれい
りの見やよすきこいひくれ[illegible]ものく
数寄(スキ)すいなよりぐくもべ[illegible]侍使(ヤツカヒノツカヒ)

の時うの[illegible]もなくはけ使の時の数寄(スキ)なりて
くこと業平(ナリヒラ)なる[illegible]数寄(スキ)なりすきみと云
と人の名といふ流(ナガレ)の数寄(スキ)[illegible]なり内
のはけりひきつきうつ[illegible]
ちもや[illegible]神のうたもこんへ
ていりもや人の見まくりさ[illegible]
拾遺(シウイ)人の見所なり　ちもや[illegible]神のうたもこんね
ものとはうかの[illegible]
上方なり地なり絶すなりけく神のいづさこ
ものんこしよりぬとも業平(ナリヒラ)と見まりさとふ
なりつさとこゆるは清(ハツ)とこくも[illegible]こと
云んなりたる人いとの上人と云業平のまなり

おとこ
悪しくはあしくも見よしちゑや家
神のいさむるみちならずして有
上有別の子細ありこれハ人ハさても見よ臣
神のいさむる道共もわかずとなり天のことさとによ
て陰神陽神となりし人ハ神の制するみちあり
あらずやなるを
むかしおとこ伊勢の国なりける女まだえあはで
となりの国へいくとていみじう恨みけれバ女
女とは斎宮なりけれバ人の腹と同事なりとなりの国
尾張なり前へ帰りくかきおくる
おほよどの松ハつらくもあらなくて
うらみてのみもかへる浪かなといへり
大淀の浦に松のつれなくもあらなくに浪のよせかへるごとく
あれハ恨みるやうなるもかへれども又はまべハ
ゆめにもなしやといふその心ハ業平の我とつらし
う恨みられども我に恨みらるゝ人ハなしと松と
波とにそへてよめるや　大淀の月よりうらみてく
かへるなきまつ深くもあしかるまじよ
むかしおとこ女あはでとそれとせしそことまよ
いふべくもあらぬ女のわざつまとなれりけるゆゑ
せしそこ文や消息もらしとて文なしよはかぞへてそ
音信の事とふなれこそ詞もろハさらぬんなり
目のはえてくよはなれぬ日のうちの

かぶきのごとく記置しそわんりろ
月中のうつくしき女とそうくいのなり嫁ようにたとへ
なりわうにはたをりうくにたとへられぬ拍なりしかも方
業の奇異なるかまりの郷の伊勢の飛脚の意趣也
むかし男女とうとうしく恨をうけて
岩稲ふるかさなる山うつくしきぬも
わうこの月はなくこひわうろう郷
さ山百水と角ぐ流まてもんたうこの道あまたハあり
すあうこ我中異山河とあぐ流れもわうこ
てこひうるわなり百業うあうこの月わまうこひい
かうりうこうあ下りとうり郷の伊勢の飛脚
のうこ趣なり

むかしたこ伊勢の國のあくいうこあんといひうれも
とんか
つうあをひうこあくいうこてあんとなり
大宣のうこあうりたうあんうう
ろうあいなうこあうこうとも
月ぬをいうこんたうぬの國のあうこうこ
角ろんいなうこあいんなぐ角なりんの角うこうこ
子とうふなるかうこうぬ月ろうこうあうこうん
ろなぐうこうこうろ祇園云あれい業平伊勢國のうこ
てあんとうひうぬ時歌文の奇なり上角い序奇
なり月ぬうこうなくうこうこのうこうこうぬとうんあり
業平のあまりうこうこうこうこうぬとひのうれん

とくもあるべき奇なりなるべきなれども人なり業
平のさまにとなぐさむ人なり歌なりとハ一さび
見えはひ人なり　大海の浦よりかをとれる色
なるを霞（カスミ）ていとくるしくなるべきなり
といひくるしくて侍なるべきなれども男
うちとけてもまさひらへなるとすれば人のなり
神あまくあまのかりかをとりけるもの
見れとあまくあまんとやされ
序（ジヨ）奇なり見れとあまてあまんとするつゝ心を
見てこそあまくいえやむもぎさいなり
とんか
岩ものうるとおもはれ見るべきなくへ

おもひしかみちうひもるべん
見るに岩間（イハ）ゆるおもはれいくへつと見るべし
侍なるべくいと見るべきみどりあくあまの（ヘン）なりき
きハきもぎくあのんさんあまの（ヘン）不変ありてもるべくへ
男のんの塩干（ヒ）しかみちかるべんわるとも動（ドウ）やしは
とをいつなり祇（ギ）沼云（ウン）ひもるなんへ海色（ナイコン）の寸
なきハとしもんきるへんの波なり色も業
平といさあるる奇なり
ちのるとくるいくうあるん定なく
みちひるるかのとけりぬとと源氏あるべこと
みて
なるあそぬきしるる世のんの

此ことて歌ハ神のしわざなり
然神ハ三和のみちひかれをまもるのしるしなり
神のしるしとならんとおもふといへり
世にもおもしろき事になん
其面白き趣向也証文一たびあひまみへし後流れ絶にけれ
きなし才覚のすさみわすれざる事にてそ
見ておもひ一夜の契つまはなく嬢子女もさる富
縁にや業平の名誉の事なり神に通しける
洩授なりその末孫ハとのゝ潜氏にいたりまで
大神宮へもまうてそのちなみに掲焉なり流
よのしし文明九丁酉にいたるまで六百九十八年や
亭なりく元慶元年より文禄五年まで七百

十九年也
抑二条の后のきさき春宮のみやすんどころ時
氏神にまうして歌ひよみて近衛流にさかりなりてひ
宮にたられ人々そて歌を御製にかくて御車よりも
給なりくしくてなりける
東宮のみやすん所東宮の母儀として氏神大原野社
也嘉祥三年閑院左大臣冬嗣公の御氏神春日と
勧請されたり藤氏の后宮ハかならずて行啓ある
又条后順子のもじめく行啓なり近衛流に業平
じ時ハまだ瓜林かくわるへりしも後ハ極官を兄すり
ありけく出家犯もうまし絶えもすべし陽成
院ハ貞観十一年春宮によみ行于時二歳業平ハ貞

就六年三月右近衛の大将
近衛殿不審なる仰せ出でられ二月上の卯日十一月中の
日まで御つとめの交衆の御所行者元年新而祭の事
ゑとを祭は藤氏右文殿にて行事わたくしなりと
のゝ名ばかりの行幸無かりしとぞ
大きやうかの山もゆるがせ
神代のことも知ひ出せ先
世のゆゝしく優なる奇なり東宮んやを而行幸を
祝ひ天照太神と皇日明神との御ちかひ
のむとおぼしめしんとなりそこ無二条の右の
みこうの内系西せ事とれば
やうなる神代ゝのゝんなりとのんなり

なるも内の奇ゝ無ゝ見ゝとおぼしめすやうんを
たることして底しんに付くんまこはさるこゝろ
須菩提も東宮の行幸の世ゝ名誉なるを
別勅ふ 江次第十四大原野行幸起五条右順ヨリ以後民部卿
母院乗る車副二条右京大夫以姫宮車後在帝
書和哥与二条右哥畧之人数先是着有密事

やうんも内のかゝるゝやうにひんいゝてひんいゝ
もう
むゝ田むゝの山門とやもみぢ
の内たゝこゝやもとんまを
て安祥寺ゝゝんいざゝろ
まつりの門ゝゝれ始ちゝ

さうけ地とまのえさうけてたりのまへよたそこれハ
山もちゝふたゝのまへようこさそやうふなゝ合て
ゝゝれ
田村のみゝ〻ハ猛号と文徳天皇とゝ申なかなも
田邑山城山崎ゝさゝみゝゝゝこさに社あなるゝ
て田むゝの江門とゝかりなり清和天皇と水尾江門
とゝかゝゝ多賀幾み良おゝ女なり文徳天
皇の御子なりいさりそうりゝ所れもゝ世もとなるも
安祥寺山科よりあり弘法大師のはすゝ真雅僧正
の所ゝ系伝順ゝは建立太元の法ゝ寺なり順
ゝハ仁明天皇ゝ后文徳のはなりゝこさゝけ地
指地ゝゝ社の所ゝゝ公卿殿上人ゝ参する地
或今のゝゝ投ゝ付或ゝのゝゝ法ゝたりそこえ
くゝけゝなゝゝ山もちゝゝ堂のまへゝ面白くか
ゝり勧世ゝ山ゝみゝたゝこさむゝ社ゝ所なる
是見ゝ所ゝ中陰ゝ佛事四十九日ゝゝり
て江海ゝ彩ゝゝ
それとゝ大ゝゝゝ所ゝゝゝ所ゝゝゝ
ゝ所ゝゝてゝのゝゝ社ゝ社ゝ寺ゝゝゝと石
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ寺
なゝゝ世ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝゝ社老海なゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なりの石の道のうひと絶えと源氏うを顔なり
後常恩ち義八月八遠ゑ
出てらやうよんてきるこ八業平のめいたうひ
なりうなを

山のみぶりのくくふうあり
美のりんととふやなるへしー
とくあのりんとをれ月くくあるさり
うつくくいこなくくれんなるへー あのこの
物山のくくなると則ひ山もくくのりんとを
ぬやくいる所の高ゆよハ月くくねも時う
のくくてもあるれるー 物かい所よんんめひ
わるへー或いくくの鼻くよ高ー 或ハ魅ひくひん

又時昔京紀の僧を事くくを時りさ函絵とれ
もひ色又へー
やくくくくりくとい高月れいくくもあくにつもくくを
ものうくハ色やはさるもくんあくれりくを
即常の所ハ後よ月まハとるのなり非者の
男んよかくも也くれくー業平の自記と月くくをりい
ま月まいくくもあくを時ハくりくんんの
わくくれくりくくとを勅云安祥寺又系伯順みを
建立寺や常紀貞観六年正月十六日桑減八年
十二月十六日右大れ二十一業平貞観七年三月
右馬ハ天安平女法事ぬ何若後過若狭
ひくたくさおとりを女れくくもくくりう物

給ひてなゝなぬかのみわざ安祥寺にてしけり右大将
藤原の常行といふ人いまそかりけりそのみわざに
まうでゝ給ひてかへさに山しなのせんじのみこおはし
ますその山しなの宮にたきおとし水はしらせな
どしておもしろくつくられたるにまうで給ひて
て年ごろよそにはつかうまつれど近くはいまだ
つかうまつらずこよひはこゝにさぶらはんと申給ふ
是はまへにいふへき所なり一段く別なれは也
るや勘物云女御従四位下藤原多賀幾子右大
臣良相女嘉祥三年女御天安二年十二月四日卒
常行西三条右大臣良相一男山科之禅師人康親
王也勘云人康親王仁明第四之子弾正尹号山科宮貞

観元年五月入道同十四年薨四十二勘物にはまたや
うかり常行貞観八年十二月十六日右大将三十一
業平貞観七年三月右馬頭に任ずとやあり女御の
卒は天安二年也されば八年数おほく違ひあり此後
追善なとなぬかと云あやまりもりや天安二年よりは
いはまにも後の事なり宮の條はいはまにも後の事なりせ
七日ちかくひきてかゝるゝん不審なり後に作り抽ぬり
事様は亡人の家などやしらぬなとも大かたは事あれや
又人康親王を禅師と申やうなる事をいふ定家卿
御さはさせてとられたりしかりは風家なりとしく不審と
たてゝ見るへきこと逍遥院殿勘物云女御多賀幾子貞観
十三九廿八卒とあるも常行右大将に任じてのちは貞観

八年十二月に業平右馬頭貞観七年三月とあり
人康親王出家貞観元年也同十四年薨とあり
よりしば女御の卒するの貞観十三年とあり
あり然れ他かの可勘之愚見云し女御い天安元年十
一月四日に卒するに仍文徳なども見て立もり志
まてに常行右大将より任ずれる貞観八年の
業平右馬頭も同七年也三代実録八年の
貞観八年筵の事なるべしとあり
見こと物こひたまふ人くれの花ものの世を勢
物語さ所よりたりやう出こたりやう行ふやう文つく
のそ人めよそなる紙やいろ三条の花みゆきせ
時きのくるの子重のそ面よりそいせ
たてまつれるさかみゆきの後なつかしうおもふ人
のみ侍しのまへのうえよりすへなりしと志こと
侍ふさきなりし石をなりんとの給ひくみをいで
んとしてとりよせ侍りけるいと
よりの花ものの和泉序よりの霞和などの事なりかの
大和ものがたりに侍ふ日本紀神代上宣授曲像益
説第一云想念とそりて方策の字とよ
ま物なり思案引第十方策の二字とよ
直の字の心なりもなくしてなるべしたゞ紙やい
文法りへのそめれいかのそ上すへきの後なり三
条の花みゆきせ一時紀の國の千里のそ面り
清和天皇西三条右大臣良相の百紀亭へ行幸の時

のうちなる百花亭とゝのひて亭と名りく居ゐ
給ひしと也 勅云貞観八年三
月廿三日幸右大臣良相百花亭に行幸の
たまふ紀伊國の守宝の石を献ずるふ行
幸設宴賜禄するゆゑ人の作りしの花にすゑ
まつりなる酒のこと行ふ御酒の黒い泉水とゝのま
せ給へ八こうれとれるせくゝ系せんとゝるり御流り
烟霞成病疾泉石入膏肓こゝのゝとり行給へ
泉水とゝ古りなり
いとけもなくてすてさぬこのゝ中ゝ中ハ
さまさまりうれとくゝふなゝハすゝ流なるへ
とくゝ人くとゝよ所ゝまも行ふみきの右ゝ紙ゝ
の紙ゝんゝ紙ゝさまゝとゝ古ゝてゝ中紀ゝ氏ゝくゝこれ所
とゝけくゝなりゝ
愚本勅云右大臣依仁監右馬寮右大臣
者左大臣右馬寮右大臣ハ相撲ハ監ハ左馬寮
中ゝ中ハ方物ハとゝりする物なるに色中ゝ中ハ色
見ゆるとする云ハたゝよなゝハすゝ流なるへ石さゝりハ
流れ出ぬやうゝれいと云ん人へ姫へ書さ海とゝ古ゝ
てゝ書さ色のかゝう海とゝ古ゝ書さ孫とゝ古ゝて葉
草の所と蓋ゝ所絵と云なゝる
あゝまゝも岩りそかゝ紀ゝ氏ゝ
んゝと見せんゝのゝまゝ氏
見ゝてゝ濃見すれ幸いだゝまゝも我ん人と岩ゝ

ひとく見せなかとなり背やうにとおりかんに成見るに
のあるかくても海見するるやうにけまでも岩よ
うつくんと見するなりかゝるかゝはあるゝ見するあり
愚見よハ此岩ハ人ゝあるひとも成見るに成ぬ者の祖
と見せなんたちのあるけまこハ岩ゝかつくる見せる
てまつるんゝせとあるゝ此流よあるひともハ行るを
うゝとなんゝもとたるゝ成ぬなりあるゝ成ぬハ成ぬ
此まこハ岩と為ゝせんゝとかりゝかゝゝ我んゝゝと岩よ
うつくゝ為ゝするそれ世ゝなり成あるひともなり業平の
奇あるのまゝうゝくゝゝゝゝかゝゝのゝゝゝ
き奇ゝて岩ゝりかゝ此流ゝ成ぬ
面白ゝゝまゝれゝるゝ奇似合通ハ
なり

とかんよめるれ
ひゝうゝのなゝふみゝこもまれたまゝるるれはうふ
見ゝゝ人ゝ奇ゝゝゝゝゝれはゝるかゝなゝるれこさ
なのよめれ
氏の中より親王のまれ給なり在原の平の女
腹より貞数親王もまれたまふとゝもなり貞数
親王母ハ業平の姪ゝあるゝ給れはゝ
女数親王乃はゝハ約平也約平ゝなゝ
にまれゝゝ業平なりゝ成ぬ成王ハ八歳ゝ陵
皇と奉ゝる人なり
我かゝゝゝちひろあれけとゝ人ゝ成王ハ
なりそゝまれゝかくまゝるへさ

和門は吾一門と云義なり彩の竹は仙家よりの
竹は宅庭なり庭燈也直なるてゝ有る拙者
王道のゝ時なり仙家の竹のちひろ三やう
よゝくゝくんとありて多命長遠と祈る祝詞
爲て夜々は拙宅実樂なりて人の苦痛なる所
を夏々もゝ涼しく秋万蔵
なんといふなり
これは古さものみこの人中ゐのゝとなんいひ
あふの中納云行平のむすめなるも
業平ぬ多の人なれいりやと人不審してひろ心
勅云員数既に清和第八母中納言行平女なり延喜
十三竟四十二

むすめとゝろへなれ家人ゝ家人ゝ
爲ゝひの所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
おつゝて
業平の家と早下して行平家
とゝ爲可給用班ゝ
骨なり
ぬ主所ゝて寄ゝ
ゝれはいくゝもわしとゝ
古今集第二業平朋臣の歌なるを爲主所ゝと
いひ爲ゝ志ゝ
いゝゝれは詞書ゝ所ゝ爲ゝ爲ゝ
業平ゝ

あるべしとて、九面白なり。毎日と云こゝろは、
とうとうの道と云人を見ハ、帝道と不知人のいひて
なり。毎日月日月よりもひて、行よのひく数云ことゝ
なり

ひとたのむ社はいまちとゝ為云源頼朝卿 年十二 位
大臣元大納言五十一 仁和三年 治承 寛平 元年
輦車 七年八月 薨 七十三 賀茂川のかなりよ六條
ゝ川のかなりとゝ家いとゝ有り流く河原
院なり業の記したるひさうなる紅葉
ゝひみさうなるもあるといなり紅葉の多
よ見ゆる折ふしなるこゝろ所なり
されゝなるゝなるゝなるゝなるゝ
しゝゝのもゝ天福の年おいたりさとあるゝ和
哥の年 丹宣家の自筆よりとゝ
てゝよ見所

さかしらせりまうれハ酒ハたいてうさやをうしう舞鶴
やの面〻なかりのとい〻〻竟者の流也ひ〻〻
つのやうなれ物の別無れんてと広廣縁なき
器てをうるとと江流なりこふい〻〻うの下よ
やしうハ歌上道部の下よりしうんなり未
度よりうなり河原院賦池敬顯覬山住虎狼葉
綿映水鴛鴦副色源順賦蓮雅潤砂月沼鴛鴦浪
葉綿照水対彩鴛添色同賦水冷池云仕衣松風
有一教秋なやゝも賦の中ふる朗詠のせてけり
河原院の事ハ前無なりなくしりの部の院地なく
き第一無くもわるうしうわまして〻後さんせ也
ちはうなりうしうさうなれてり

ひつまれ毋ハこゝのようるん
こゝとたんてさうの塩竈ふたりて我ハの川ひたうなる
の浦ハいさのうんひりすれ毋も家よりれてうしう
かうなハ船うなかくうなハ面白ハ山岩う盛交り
見すうハ恵崇烟雨蓋鳳坐歌津湘洞庭歌喚扁舟
玄故人園是丹青とひまるう同りや古今ようみう
のくハひくハあまりやうなハの浦うく毋のひそうれ
ちも貴ちびおを懸ちの共ひひわとふんてくあま
ひうくうり波ひうちうなハの浦さびくもんてひう
う部宅家里ひうとり波ひうくまその月ハあまと秋のあ
のしかうなハのうる
とうんうくうれみうのうあいさうう海よりやうそ

[illegible]ろうとうの[illegible]六十よ國の
中よりあらはれいでたりけるこれいかん
かのおうなこたへていはく[illegible]
やこたへていはく
氏河内と再尺寸なりみちのくにいさをたい
業平よ限りなき雅人にてしかも[illegible]なるへし
はよ氏浦の名誉なりあるも毫者のしるべきう
むしろまてこれあやしとみこれしもうり山
ひさうのあるよ水無瀬しいはわうとうり幸毎
ひさうの記さうり無とうへなんれなしもうる
そのはみさのむさのかたなりるとうの人とはよりて
おくしもうり

惟喬のみこ動公惟喬交流第一母淑子紀氏名
虎女四男号小野宮小野宮小野宮よりもしもとよりて後よ
小野の宮とは春のるのかた業平なり
時よりてくひさしくなりにれいその人の名ひとれ
ものの神ともせくさけとのみとはやはやは
奇よりてきりうりかりさるのかたさるいと
そのかんのさてこにたりうりそのあれもとよ
たりのくえることたりてはてよりもしもて
みふくさきりうりうさのうこかりうりの人のよりの
を人の名ひとれよりうり業平の淺友とくすりや
やまと奇大和國氏殿よりの潰流こ安保親王
のようて四十よりあまれまて世淺友なれいさい

つもりいなるへし

世中ふたつくさつのなりける世界

そのこゝろはいかなりけるまし

古今集(コキンシウ)のなぐさの院(イン)にて業平(なりひら)あそんの

ものがたりに奇(キ)ハ金篇(ゼンヘン)記(ノリ)ハ糸(ビヤウ)ヘンに方(カタ)なりとあ

なるまに記ハ糸ハ記(ノリ)さうしに活(カツ)ふるまを咲(サキ)ハ

ゆめくられくしかくの記(ノリ)りとれりつまを

ろへハ風雨(フウウ)ふんとうまをめ(メ)ぎつまハ石(イシ)ぶまをふ見

皆(ミな)ハ人なる世上に橘(タチバナ)の源(ゲン)くなくいまのんに

紫(ムラサキ)なるしるしいろ

ごとなんとゝ見ゝられ人の

有常(アリつね)の奇(キ)なるを

ちまたにうゑ橘(たちばな)をたゝれ

うゑ世になるひさしうへさ

是ハ業平のわまをよ記(ノリ)しるをたりひて

ものなるなりとめてうけまを是しるをれとゝふ書

橘(サクラ)とう記のうへハ賞(レウ)翫(クワン)すべられうを世ハ盛者必衰(ジヤウシヤヒツスイ)

のことわりを世をとゝるハ橘にありとゝふなり

やくそのあのりこゝをうるに目られをなり記

ともなるへうけとりをくをりいくさをりひさけを

のこてんくくくに記(ノリ)ぬりわをの門とゝふ和

よりわみこをむをのこをれはをさをるみこの源(ゲン)ひ

為(ため)のをとうをくわをの門のほりふるを是(ゼ)をて

奇(キ)をて盃(サカツキ)ハ世をのこまをふれいをれひをのこ

てなるべきなり

みこと鳥羽殿にて業平朝臣とこと歌

かりそめにこゝろ通ひしあつまぢ

あまのかつぎに歌いさにて

あるのめにはたゆたひあるまじ日もくれぬとなる七

夕ばかりあるべきとうもてつる

みこと奇とおもふ事あるべきなり

あるべきにはたゆたひあるべし

面白し金輪の奇とおもふやみ流敵を知人

ぞ惟ふ人しるべきまゝにまゝ

つまのかつぎにまゝさかり業平のうらふり感

じ給ひしなれば組みけるべきなり

なり摂政ちかたちにてまゝ古つ人の

こゝろを見なべき 白雲の波をたゝみ養ま

ゝすめば住める世にこゝろをなれなるべき名奇

れば説清輔朝臣の奇道の事ばかりの道

者なりしかも宇治つて河水久流といふ巻とと

つゝこと云ふ家中にまゝ赤面ゐる浪

辛へる宇治のまゝりもとうんいる世にあり

ぬ水のみと辛へるの文字とすへるとア

されなるべきなり執心源氏事なりみ玉前ゐる美

紀貫宴食物ゐまゝ巻かまゝ流りぞりと

口へくそれと人ゐ見せて春ゐると云流思也

家道なりはみの巻ゐ牧ふと見べく奥とこ海

して有常の御前とよばるる所なるべし
いにしへにてもひさまとは見まほしい
宿かりて人もわびしとそれなりふ
七夕(タナバタ)にひこぼしのよう宿とかんとかれそうへ人
世界宿とかりてとしなるよ宿りて寺はみさまう
さわやかなり
かへつまく変よへせ沼ひぬ秋ふくかまてさけのく沼沼
してあるーのんとあひくくへ沼ひたんとを十一日の
月もかれなんとすまはかの右馬のかみの
かへつまく変よ水世(ミナセ)秋の変なり三月十日のころ也
わるかくよまるさも月のかくるるくら
山のくるまくいまともわるんん

古今第十七ようるかくるかるる見は親るのと
ちとれたるまとりとふんるり山の端ばてい
れるるいるるるてるるくさの有常
みるかるるくくまるつくくなるるんん
とるかくくるるもるるるるるるるる
山のくれくはるもいるるるとと
浸撰(センツケ)ると上野家雄(カミノミヤカツ)とるる沼沼の級なる山の端
まげくとわひまるくくるるるんい明也愚見(グケン)と
色家(ミヤ)もるまるるるるるるる平地とな
まるくくるるるとわると
もるるみるせるるかるるるるるるるみと色るの
かるるるるれるるるるるるるるるるるるるるるる

まいり日ころへて兵にゆられたまふなりけりそへつゝ
しそこハあハれとおもふにたにほとこと給ひ給へくしきま
ろんとく比ハさつまりこのむすめのくもんすくみ
かなしくて
むかし水無瀬に遊ひ給ふ都しるしの事や例のる
しいまも狩し給ふは葉平と比流にめさるゝなら
日ころへて京にゆられ攻京なくの夏ならは道
もくとこハあハれとおもふにたにほときと給ひ緑給ひん
しくハいかハさうつましりと思と説にふれしなく
家ふとく云一向に悪縁なりとはいと成とハいさあなり
馬の戒なりとかりて又とは説かし何とやらん常
まれも人は桃仁の新なと不審しうるを返

あらく此出家あつまた狂の御名殘とおもひしめしたる
氣色なるへし
まうとらく世をひさしからむとせし
秋の秋とさとしらまれなくそかり
と秋ハ世に枕乃むかしまへりともすへらて秋の秋こそ
あはれとそやとひたとりを迎春霄一刻價千金な
まけ孫むしろくあはれんとこそ秋の長き秋さへる
過きにまして短秋なれハとふなりうらみ
に草乃結ふともそしられの春の夢の枕や
さましぬ時ハやとひのたとりをなりくりみこそかと
りきりてあし給ふくなり
三月尽三十日風光別我苦吟者共君今秋不

須臾(カノチン)刹那(タイタラ)に曉(ケウ)達(セウニナフ)是(コレ)まことにおしく人も云をもしりて
て他まつ業平のひとりことには御子もかゝる
ありまし後となり
かくてまことに此からは御名をなりひの外に詠
くしたまふなり
かくて世に忍び御祖(フダシ)惟(コウ)御名をなりひのから
小野にとゞめおき 惟喬(コレタカノ)親王(ミコ)法出家(ケ)貞観(チヤウクワン)十四
年七月出家寛平九年二月二十日に薨(コウ)ず惟(コレ)喬(タカハ)文(モン)
徳(トク)第一ノ御子なれハ備(チヨ)君(クン)になり給ふへきと世にそ
つたへたりけしに清和(セイワ)にひきさげられ給へる
事とおりひの外とハ云也
む月にをかみたてまつらんとてまうでたる
にひえの山の麓(フモト)なれハ雪いとたかしおしてみむろにま
うでゝおかみたてまつるにつれ／＼といとものかなしく
ておはしましけれハやゝひさしくさふらひて古(イニシヘ)の
事なと思ひ出てきこえけりさてもさふらひてし
かなと思へと公事ともありけれハえさふらはて
ゆふくれにかへるとて
小野(ヲノ)にまうでゝとハ小野ハ小原なり家に閑居(カンキヨ)
しつくましまし給ふ所へ参るなり丹波の細江(ホソエ)の小
野に惟喬(コレタカ)の親王おはしませしと宗祇(ソウギ)説(セツ)にいへども
ひえの山の麓(フモト)なれハとあれハ小原のおくの小野
無二(ナキニ)異論(イロン)なるをみむろとハ給ふ室(ムロ)なり弘法(コウホウ)
の南都にある寺をもひ給ふ所を御むろと

いなり寛平法皇の仁和寺よりこゝを御覧
ぜられてしとのたまはせくるとく相如
をてしほむ数なりめしをかんぜもぜして
見ふかい世下の事なり平ひえの山のふりて雪の
くもりなくそやしらみむろよりわたるこゝ
もそなむはまくるよ和なるべし大きの人ぬ
ものべさよしはみ風流なんしの世代そむき
ふはんのうちりそみうしんくゝ立まして見るべ
きぬかるもいあしへの事はたりひ出くりく水
瀬などへ常よ系りしうといひきうへ山居して
雪中よこゝりたゝこゝ西を事しもを数くたりひ

はゝ事くゝおなるへ物もさふひくしくゝそのこ
まくゝもゝへきなれも業平を清和御門へ渡へ
なりよりもくゝ勿をくゝ但をはかなりさ
まくも名所のみきまくよ書よなて海ふん和歌
竟孝法師はこの院を清くはかりをを流せて
やなりも行基四国寺を竟孝をせんくゝ慈
院をくくくゝ言をやをたりふ却
雪ふくりく高野をんくゝ
はくゝ歌をたりひくくようつくゝたり
えをも法よはくくさををくくめをへくゝ高氏
閑居遠栖のはくくまをを雪ふくて見なんくゝ

[illegible]ともなる[illegible]業平も[illegible]の名のみやゐるん
雪も[illegible]なれをよくかひちゝ義[illegible]ものうれもん
うれ世をそもうさるとうんかそうやしさ[illegible]
多の[illegible]奇と[illegible]新古今小へ道[illegible]院殿[illegible]
よし奇とゝへてとれ[illegible]なりされいひさ出くもう
しかう面しさかされもなかれりひくこの
[illegible]奇と[illegible]の紀者のうゝ[illegible]業平の奇おゐ
あとれかうさゆへ[illegible]
むゝれとこうゝう[illegible]
[illegible]
京[illegible]
[illegible]

ひとう

業平のとこうもうある心りやさ而業平の自紀と
[illegible]
豆河親王の紀事なるもハ京[illegible]業平ハ
[illegible]
[illegible]保親王の紀ハれ[illegible]伊豆河親王の脱[illegible]
[illegible]業平一子なるゝ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いよいよかんまくゆきさまの邪
さまの別無常のなくひとさまの道なりと不審
一生ひ寿減なくてうゑさられとも動ぬまいと
よきものまれぬはよくよいよくゆきまくゆきと
かのみいくさ折なくもあれ
慶長三年九月晦
世中よさまの別まのなくさ光
代りこいの子人のまれくさ光
我一分のうへとなりてもとして世間へうけくさなり
死すくこいて事のなくもあまくー一切家中のみ
さるまくたなりよかんとなりひらくー我も
則こんをもつ運の我無のあるよ盂蘭盆と約まて

もと同じなり
ひとくれとこそくりつくまつてそくる君
ひくれくたまくてたまくてひくるひ毎月かなくまくも
なりわれやけの変化人くんい常毎えまくても
ゆまくとりくのんくなくくまくてくぶくよんあるく
くるひくくまくくくまくくくくくくなくしなれ
わくたまくわくまくくくくくくくくくくくくくく
れくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくやまくみかくくくくくくくくくくくくくくく
いくと思て奇くくくくくくくくくくくくくくく
愚見
いくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ますくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

きせかたちの幸はさえれつきなるせんなるそく
を信(ノブ)へかち禅師(ゼンジ)は法華法師(ホウシ)也(コレ)雅高(タカ)の法うし
れたりたまふ時はしもて法師よりなるものゝや
うきなりいと心月あれはひさはくろひ税銭(レウゲン)するなり
れしへとも分とつけねいりんせず
雲の法りゝて我て法なるる
れしへ是と云文字は大くさあくいとれはりのなり
ふへしもくくと大くさ義なり源氏末橋紀(スヘツムハナ)の書の
初めも思へくもかれわくるもしたりの家つとれ
法とといひ出せり是とひまくるをくいこへた
京と文法へとれ分とつる事のなくひるか
れいくまさんとれしへ雪のこはとうくく

ゆりく京へかへくとひの長実(シンジツ)是よりつとたこ
とれくんのまくるのやくいくり
とまりりれはんとくくわくれりたまふて法た
ねこくたまへつまくり
おのるなくひ奇と感(カン)せられてのるなり
ひくいやつきれくこうくるとあひいくりくるの
くれやくるれは法かんくいひくて面をおくり
幸くこの法へくる女のりくれんくくるくんとや思
ひくんれくこ奇とくてやまりる
とのくれやくるれは形やとれそれくるんなり
ふくはくさんはひくくのれりひとくれくとぐん
とふなり

今までよもんれぬ人世にもわ
とのうさぬくしもの人ぬまこい
若年の昔うれりしもうしもわるこわさと
ちく年のへぬまこいたうさうく笑意わるへし我い
ちんれぬこいい義なり
とて面こふろりれこともせもわひこれまこぬこうへ
うなん出りろ
れこるれぬ変ぬうへいりくの事ともなし液二
乗石なぞの同なるべし
むりれこはの国むこのこりわりやのさこふ
ちろこしていさてすころり昔の奇ろ
芦屋の里業平の伝ぬなるへしむこの奇ふ

と古来乃渓和なるを
わこのやのなこのしかやさふろり
ぬりつこしもちもさふろり
ひ奇と昔の奇とい組ひ奇新古今集巻十
七雑奇中ハ業平の奇とのみなれい業平
の伝ぬなまバ細く下向なりれい業平の
ゆる奇ととぬ涙なりれ世乃まい新古今こ
そこぬなる稀石院奇こ
なり書ぬなりひ奇とかこ
ぬこりこ
業ハ志賀の塩のめり塩焼ぬなこうけの
れこちりれ乃なくハこれい国郡在不

本ね遠かりまひ哥なとんむしきなりいやしき
ものからしなし氣わけくる見えなとゆふ事もなき
といふなり
とよみけるそこの里をよみけるとなんあしやのなた
とはいひける
とよみけるそこの里とまてこうむとして蘆く濱
なゆそて白とところちくやてとなんあしやのなきて
きいひけるしりくまもきつけそうは説によき
なゆそこのさくとよみけるなゆしきさかる両説り
とおはせつかしなりし説よとよみけるそこし切て
此里と濱なるときめす私云そこのさやとよみける
らとなんあしやのなたといひける私曰そくさ云

是攝州の能者のうはきのなれハそこをかくも能
道理よあひかなへり
このおとこなま宮つかへしけれハそれをたよりゑふ
ゑふのすけともあつまりきにけり此おとこのこの
かみもゑふのかみなりけりそのいへのまへの海のほとり
にあそひありきていさこの山のかみに有と云
布引の瀧見にのほらんといひてのほりてみる
にその瀧ものよりことなりなかさ二十丈ひろさ
五丈はかりなる石のおもてにしらきぬにいはをつゝ
めらんやうになんありけるさる瀧のかみにわらう
たの大きさしてさし出たる石ありその石のうへにはしり
かゝる水ハせうかうしくりの大きさにてこほ

まことにたとへなりとぞ人々はみあさきの帝とぞかの
おもふのうちにんとも
此男あはの交ぜうへ〜くれいとおもふ葉平の自況とも
えてうかまへ〜ぬの交ぜうへなりけりわそぬるとも
いかなるも清和の位ときやうの山のすけたかの門書云
おのすけ長門書なりけり常に歌のなりけり男
のこのうち行平は業平の兄なりとも云なりも行平
とたかの門書時なるへ〜愚見在原行平貞観十四
年八月廿又日叙従五位下して授たかの門書五十七同十
又年書とやう〜かいさこの山のうちまはれと水
の山のうちとも見てうへわるも云源道明実成流なるも
いさこいさこふ彼也登 孤山朝澄朝白波底長絃音り

寂蓮内大臣

苦のやのいさこ孔山のそはをうちまはれいかに布
川の流を流拍ちわをとなりと方拍ちも勝ちと云
流もちと流拍ち高綱なる流ちと流ちと
くへりのたきと云彼なりちさ二十丈廣さ丈なる
やうさ方孫弾う天台山の賊ちう弾なりんおと
名もとこはゝと文殊こあ〜りるよ彼ちりつく
を名度なりもせうかしちりのれはさめ泡と
一神なりるふのうちんとむ行平ちんとむなり
我世彼人々ちわとうやまはうひの
なりこのときといはまてさけん
わのうち命のうちあもとと云はわ〜もと立
原民の河とあもとして都よひさあるこ国

今はてはひなとて紀ノ国の臣下
北ハ北ニ命令不義遊なとあるハ臣下なるものなり
ちらちらとするハ北ニ雪をとせ雪を雪と今日のあをとを
うひのとしのうちのうひのうしハ間なるのうしの白ハ世よ
開ハ世ハなかきの滝のと白と切てたさとの
まてうらんとも紅葉ハ流しとなるされと
をそれハ北ニ雪をひらき間なるこのとんのうち
よ白と切てたやとうとて出るへきうハ流也
あれ〳〵流さうとを
紫平なる
ぬさみてうの人とそあるとしとをのの
まあるもちろん神のせとさうと

ひ瀧の水精のもとを糸ひきよりあきをとを紙を
引ぬきて出とみをとを拍子なるとを言てぬさ
みをと人をうんとをいのりまあるもちろハ北ニ雪
ひもなくちろれハ我神よハ白ハやとて白ハちと
早下せうたに間なるちろハ我神のせとさうと
ゑなちとをの
とをあるうれハうこの人をとをとをやをうんひ奇よ
紀ノ国やをうの
かうこの人をとをあるやるの前よをうをとを紫
平の自泥と見ををうひ奇よあをとを白をうの
ひ奇よ人をとをうをうをうをうきをを初もを
ををうをとを奇とも白をとして白をうを也

かりくるみちとなりてこれせみのこえ
家のまへにはなはだ日くれあやしとりのうたやまと
あさのいろをまれにみゆるものあるこの
れをこそ

布引のたきみやしろあるやのこえへいとつきそうたなんか
つとめん所とたうふたりくもまゐてもいつるあの
なりをこそ見つるもうしほのりの高しん糸屋にはて
を泊人とて不思議若狭守なりしよりて家なし
他つくるこそうるはしうつくるうるはしき道をさ行よとあれ
家とはつくるこそ人の家をこそいひけれ
ものまへにはくるにはのくるなりいふ地獄の仏也
徐福宅前湖水東なりしこの中にみるかしこう

なりしかしこ事なるをわるくこそ業平也
ものまへにはの早き河竜のはるかそ
我をもむかしのあさのなりしこそ
晴天のはるかに河竜の蛍々我行しの蛍のたくひ
うとなるを雨やみなるそこのはるそいるる文字
奇の彼よなるをたあまりかりをとひくこと面
なるをこのかりうといろ孫をなる文字や
いるを決とかいまをも目奇実なる和とかりんと
てはるかに河竜のかるのたくひて新ひう
なるを流りしは奇かりかりいれもうさ
ふうなるを我をもむこをかはまのたくうを
行せれなる宗祇法師こうをたくを竜

とかや　わさ風のふきわけりしたて侍るくこく
ハまみつかわねつなきのよすから　かしのやすからち
やまふかきやたくかりひきとひきよろほりえ
侍り
とよみて家にかへりきぬその夜南の風吹て浪いと
いとたかしつとめてその家のめのこどもいでてうき
みるのなみによせられたるひろひて家のうちにもてき
りくる女かたよりそのみるをたかつきにもりてかしは
かしはをおほひて出したるかしはにかけりも
家にかへりきぬわしやの家なり浜とあへるハ南の
風吹て吹わたしたる早朝也よしたるハ浪によせられたるひ
てよるといふみるなり見完と云もまて為家

よやたゞ芦屋の里の夜の日ににほへくるもそふそ
のかたちかりハ宮内比ゐの南の風より紀見ろのするくまで
ましかのやの里高坏(タカツキ)むりハ土器に飯をや
わたづみのかざしにさすといはふも
君がためにはをしまさりけり
わたつみとハ海神の惣名にいふ事なり又海神のこと
にいふもあるなりいはふハ祝(アイ)するやうのことなるを
海神のかざし也と秘蔵(ヒサウ)するといふものを日本
のまれ人にはをしまさりけり折しもわまつりま
この藻(モ)と風のふきよせてあるを為せんとなれり
わたつみのかざしにさせ白妙の浪もてゆへる
淡路(アハヂ)島山とよみしハ浪をかざしといへり

の中人の身なくハわきまへつゝもやたゝすや
是ハ伊勢の海なりけりやされハ中人といふ人の批
判する詞なり抽いは有餘不足の二抽なりといふ
もいふとなり奴纖地にてはひしきゐんなり
むかしとはうきうはわかねこれかまことをもわか
まして月を見てくされハ中にまひなるを
中年よりも中年になるて分別もらかりそれか
中にまひなりハ業年や
おほくハ月ともめでしこれそこれ
ほりましハ人のおもひとなるりの
此五文字かくらいふれハなり十の抽七八と云んと
月を候にくる貪着せるんともむかり花すても

和歌あくもよ人のよにくも着おわかくハいかにと
なるをほまハこをゆくる力を換すわりのさ若さよハ
わかねと云残よ年大事りて抽の分別もいくこそ着
すましきと云んより出せる歌なり月あも
わきまし貪してられわかまさ我力ともかりみんと
無常とも観せすそもおもしく殺生を遂りく
て終よ生となる残よさのこハめぞしと云んなり
月とものゝ字よんと涛く白楽天贈内詩
對月明莫思往事滅君年損君顔色
おひとなるとも思くハ雪のふ人なる月を見さらん
むかしやしりぬわとこ我もハ悔さるまくろ人と思
ひうけくとしへるる

それもなりやとなれ人なるへ
へ
へれをいまこひ
ゐ
ゐまの神よあさ石
ねなされりひゆへこひ
あく死たるそく神よな
なを梅もくそれるゆへ
かこらそるんなり
ひ
ひ
まとやれりひんさ
ろと浪なくまく
れりろるろ撥
ぬなさんあひさかさ

撥死々ふうかもかつあ
あるのこうあとのこれと
わとわんといへもこのこ
そかくさうるよ白へわと
云なりあとの神のこと是と
事と如とあるされも不法
とりふんへもうさへ
ふよりたのめもこのこ
ろ上と尋ねる伊場
ひ
ろるさよ
ふさんとこよふさんさ
撥死々ふうかもかつあ
あるのこうあとのこれと
わとわんといへもこのこ
そかくさうるよ白へわと
云なりあとの神のこと是と
事と如とあるされも不法
とりふんへもうさへ
ふよりたのめもこのこ
ろ上と尋ねる伊場
ひ
ろるさよ
ふさんとこよふさんさ

月日のゆくをもおぼえたりのそうしゆくにたとへられた
るはゆかなるをもそのひとにあたりて此月もまさ
かねおしく月日のうつりゆくなりその人にいはあ
きらかに月日のゆくさへあはれなるとせ
打ちも春のかすみのうちに日の
ゆふくれにさへなりにけり
後撰第三よみ人しらすしもさる三月の心はめでたき
あるよし月日を人にいふ三春さればこそ
むかしよりむかしの夕暮にさへなりぬるものもありおもふ
人はわすれてゆきすりにゆく月日はすこしかはれ
ゆふくれにさへなりにけりといふ不知切なる心
同しさまの三月のはてのことを云にもいひつくされも

別くわかりやすき哥なり
むかしこひしきに涙かへまて女ありしせしそこを
たとへせしなり
せめてそこをかなしひともえいはぬ事なるへし
おもふこたらちねしは母いくそそひ
ゆきかへりしんかなる人もたまき
万葉にたらちねは母と云ちちはたらちを母なるを
とおもひさなる母をたらちねと云也私はおもの
中へことのほかへみてもをしふ人のあり
内に分かりくすましたる人の春に流るはわすれて
たらちねは母と云たるをおもひね詮也 ほりにこ
くたらちねしとはことさかりたらちねし人にやこひ

つかん
むかしおとこ男ハいやしくていとおしきれいさへと思
ひろけそうろうもとしたのミゆへささ候つやわかを
そんゆへてたもひたさくへあわいさひつひくをあ
男ハいやしくて業平卑下ならいとおなさ
人中一たとさへなるもをむしそのミゆへさ一向よ
されもちられぬやミせいよくん彼くしなる
さ候なり
わかくおもひハすへしなきそへかく
たりさいやしさくるしかりそり
天福のなりはあかかくと教とさせりたとひ
定家の自筆のなかりともちやうとハ後人の
追筆もあるへそれハ歌を信すへきよわつるを
ちんあかなくとよきこきこれつて念比なるんなりを
なそへなく平等と云儀なりこひよおもひを
すへしあひちハたりさいやしさもなきそへなく
くるしきと也　世中よたりさいやしきなきそへかく
なとゐそうしおもひなるらん　山姫のことも
よすさもなきそへなくひと門をそあね它方の
りみちて
むかしもかくはなる事ハ世のこゝろさうやそうん
との世もかくわれハむかしもかくやと泣せり